



COMPANY'S
CHALLENGE

NO.82



地元作家を発掘し、グッズ製作から マッチングまで幅広くサポート

(株)ピンズファクトリー 代表取締役 高田 一夫氏

地元クリエイターを応援しながら 印刷の新たなニーズを発掘

2008年に福岡市博多区豊で設立された(株)ピンズファクトリー。福岡市内の企業を中心に、名刺や伝票、ポスターやパンフレットなど、さまざまなPRツールのデザインから納品までを一括で担ってきました。代表取締役の高田一夫さんは「20年以上印刷会社の営業担当として働き、紆余曲折あつての創業。当時はとくに特色があるわけでもなく、一般的なオフセット印刷を行う印刷会社でした」と振り返ります。

そんなピンズファクトリーに転機が訪れたのは、2017年末に福岡市中央区清川にアンテナショップ『印刷ラボ・フクオカ』をオープンした後のこと。自社物件に

入っていた店舗の撤退を機に「周囲には小さな事業所が多く、名刺や封筒などの印刷需要があるのではと考えました。その頃はまだまだネットプリントも主流ではなく、気軽に使ってもらえる町の印刷屋といったイメージでした」と高田さん。ところがオープン後に顧客として訪れたのは、イラストなどを手掛けるアマチュアの地元クリエイター。販売用のポストカードなどの相談が多かったと言います。

そこで、2018年5月には地元のクリエイターらに声をかけ、店内でポストカード展を開催。以降、毎月のように展示会を開催したほか、美野島商店街のイベントに合わせてミノシマ・アートストリートを実施。路上や店舗などで地元クリエイターが作品を展示販売できる機会を増やしていきました。そうした地道な活動がク

リエイターの間の口コミで広がり、現在では顧客の9割がイラストレーターなどの作家に。クリエイターそれぞれの意向を汲み取りながら、ポストカードやポスター、作品集やカレンダーといった紙媒体に加え、缶バッジやTシャツをはじめとしたグッズ製作も請け負っています。

印刷ラボ・フクオカが選ばれる理由は、そうした製作や販売機会の創出だけではありません。個人で活動するクリエイターにとって、印刷物やグッズを製作する際に最もネックとなるのが、ロット（生産数量）の問題です。「個人では、多くのロットをつくることのできない分、コストも上がってしまいますから」と語る高田さん。そこで、印刷ラボ・フクオカでは、クリエイターの希望する数量に自社が買い取り販売する数量をプラス。製作

【プロフィール】

京都市出身。印刷会社の営業を経て、2008年に(株)ピンズファクトリーを設立。2017年には福岡市中央区清川に『印刷ラボ・フクオカ』をオープン。以降、福岡の地元作家発掘に取り組む。



1 ざしきわらしさんのイラストを使った壱岐の観光ポスターを手掛けるなど、印刷ラボ・フクオカではさまざまなマッチングの機会を創出している



2



3

2 POP up LABO. (ポップアップラボ)と題して行われるポップアップショップでは、つながりのある地元作家の作品を展示・販売している

3 美野島商店街で毎月第三土曜日に開催されるミノシマ・アートストリート。毎回10〜30名の地元作家が参加し、オリジナルグッズの販売をしている

コストの低減を可能にし、ポップアップショップや店舗、ECサイトで販売することで自社の利益確保も実現しています。

インキュベーターとして 地元クリエイターを世に送り出す

印刷ラボ・フクオカとの関わりが深い地元クリエイターのとして代表格が「ざしきわらし」さんです。独創的なファッションに身を包んだ女の子のイラストが特徴で、大丸福岡天神店やキャナルシティOPA、三省堂池袋本店で個展を開くなど人気を集めています。高田さんは、そうしたイベントでの仲介役を務め、クリエイターに販売チャネルの提供を行っています。それに加え、一般企業や行政に対して、作家のイラストを使用したデザイン企画を提案したり、作家自体を紹介したりとクライアントとの架け橋にもなっています。

高田さんは「この事業は、自社のビジネスの面とクリエイターの応援の面が半分半分です。応援しながら企業として存続していくためには、利益を生み出さなければなりません、大きな可能性を秘めた事業だと思っています。これまで30

年近く続けてきた印刷業界のすぐ隣に、こんな大きなマーケットがあったなんて考えもしませんでした。ある種、印刷事業というよりはインキュベーターのような感覚。作家の皆さんはどう利益を出すかというところが苦手です。企業からのニーズを掘り起こし、どうやって利益を上げていくかというのが私たちの仕事だと思っています」と言います。

本業は守りながら 近縁から新たな事業を

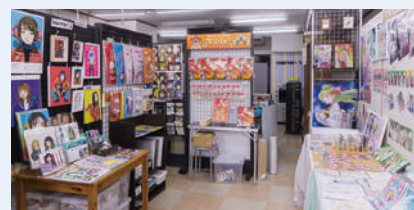
「この事業はまだ素材の状態。これをいかに拡大していくかというのは腕の見せ所」と、今後はプロダクション化し、作家のマネジメントにも携わりたいと意気込みます。一方、マッチング事業も強化。今年6月に福岡国際センターで開催された九州印刷情報産業展九州サイン&デザインディスプレイショーでは、「Creators Exhibition2022」と題して、作家約50名の作品を展示。プロフィールボードやグッズ販売、作家本人による相談会などを実施しました。

「いつかはこれを単独のイベントとして成立させたいと思っています。福岡の経

済規模であれば、もっともっとニーズはあるはず」と高田さん。

斜陽産業とも言われる印刷業界。そういう時代だからこそ、高田さんは本業を守ることの大切さを訴えます。「本業の維持に全力を注いでいても、プラスアルファの売上を出すのは難しい。印刷業界がシュリンクしていると言っても仕事はたくさんありますし、その中でいかに特色を出して新しいシーズやニーズを見つけられるかが鍵だと思っています。印刷業界一筋でやってきた私でも新しい道を見つけられたのですから、コロナ禍がひとつの機会となり、ニーズを積み上げ、ひとつの部門、ひとつの事業、ひとつの会社として成立させていくことも可能はず」とエールを送ります。

取材日：5月23日



(株)ピンズファクトリー

印刷ラボ・フクオカ
〒810-0005 福岡市中央区清川3-12-1
TEL 092-523-6718
<https://www.pj-p.jp/>